

連載 2 『心の不思議』：精神分析映画とは何か？

『キネマ旬報』創刊の翌1920年に『新青年』が創刊された。一方は映画専門誌、もう一方は探偵小説を売り物にするメンズマガジンとして成長するが、この二つの特徴的な雑誌は寄稿者にも重なりがあって、1920年代の日本モダニズムを牽引する趣があった。『キネマ旬報』の重要な寄稿者である岩崎昶^{あきら}は、『新青年』をほぼコンプリートで所有していると噂されたものである。

この二つの雑誌が、あいついで、G・W・パブスト監督『心の不思議』（Geheimnisse einer Seele）について座談会を掲載していたのは、その交流をうかがわせて興味深い。『心の不思議』は「精神分析映画」と銘打たれ、フロイトの精神分析理論に依拠した学術映画と謳われた。主演は、『カリガリ博士』のヴェルナー・クラウスである。

先行したのは『新青年』1928年3月号（奥付によれば2月1日印刷納本）で、出席者は甲賀三郎、江戸川乱歩、辻潤、水谷準^{じゅん}、村山知義、渡辺温^{おん}、飯島正、武田忠哉^{ちゅうや}、横溝正史、飯田心美^{しんび}と、錚々たる顔ぶれ。乱歩は飯田に『カリガリ博士』の興行上の成否を尋ねたり、日本の探偵小説界で「始めて精神分析を取り扱ったのは僕で、フロイトを紹介したのは甲賀君」と発言したり、上機嫌だった。

『キネマ旬報』（1928年2月11日号）は、さっそくこの『新青年』の座談会を一部転載し、4月21日号で、「医学専門的立場より見た『心の不思議』合評」を載せた。なかでは医学博士の肩書で参加している正木不如丘^{まさき ふじよきゅう}が、探偵小説作家としても知られている。正木が口火を切って、議論をリードし、日本精神衛生協会としてこの映画を推薦することを提案した。一同異



『新青年』創刊101年記念
展覧会パンフレット（神奈川近代文館、2021年開催）

議なしで推薦は決まった。こちらの座談会参加者は、潜在意識の葛藤を目に見えるものにする映画の力に関心を寄せ、医学博士齋藤玉男は、「『カリガリ』出現より十年位ひになるでせうが、もつと映画は斯ふした方面に考慮されてよい」と述べている。後年、大槻憲二によれば、1935年10月5日に、東京精神分析学研究所の企画で『プラーグの大学生』『心の不思議』の上演と講演が行われたともいう。

『カリガリ博士』では連続殺人を指駈するマッドサイエンティストあるいは精神病院院長を演じたヴェルナー・クラウスが、『心の不思議』では自身でも統御できず認識できない意識下の葛藤、嫉妬、殺人衝動といったものに苦しめられる患者を演じている。その役どころの連想から、『心の不思議』の観客が『カリガリ博士』について言及しなくなったのも無理はない。だがそれだけではない。H・ロッセ・アイスナーは「ドイツ表現派映画の歩み 魔に憑かれたスクリーン」のなかで「男の夢を再現する幾つかのショットは、表現派の様式を借りなければ決して撮影されえなかったであろう。パブストが、物体と人物に光線による非現実的な立体感を与え、建築上の遠近感をデフォルメし、この世界における自然力の相対的な釣合いをゆがめる手段を発見したのはこの様式においてである」と指摘する。表現主義映画の様式という点でも、『心の不思議』は『カリガリ博士』の流れを汲むものであったのだろう。なによりも、精神分析の理論が映画の物語内容に適用されたという以上に、映画は無意識を発見したメディアだったのである。



『新青年』の座談会を一部転載した『心の不思議』（『キネマ旬報』1928年2月11日号掲載）の広告1ページ目